

健康文化

トラブル続きの留学一人旅 渡航初日編

前越 久

いささか古い話で恐縮ですが、最近、家内が捜し物をしているときたまたま私がアメリカに留学していたとき家内に宛てて出した手紙を取り出してきて見せてくれた。その手紙を読み返してみると、色々なことがよみがえってきた。ここで特に印象に残っている思い出を綴ってみることにした。

1987年7月、文部省短期在外研究員としてアメリカ合衆国食品医薬品局（FDA：Food and Drug Administration）へX線スペクトル測定に関する研究目的で留学した。もう10年も昔のことであるが、とにかく初めての外国旅行であったので不安と緊張の連続であった。ここではその渡航初日に、予想外の出来事に遭遇したことなどを中心に記してみようと思う。

7月1日（水）、名古屋空港からANAに搭乗成田空港経由で、ノースウエスト機に乗り換えワシントンの国際空港へ向った。飛び立ってからまもなくして、アメリカ人のスチュワーデスが来て、いきなり **Something to drink?** と聞いたので、つい、うっかり“少しコーヒーを”と日本語でやってしまった。スチュワーデスは“スコッチ、OK”と言って、さっと立ち去るやいなやスコッチウイスキーを持ってきたのにはまいってしまった。“少し”が“スコッチ”と聞こえてしまったらしい。左隣の座席には安川電機の社員で渡米2回目、右隣りは大分大学の教授で頻繁に米国と日本との間を行き来している渡航ではベテランらしい。大分大学の教授はピッツバーグへ行くところとのことであった。こんなことがあって、いきなり両隣の御人にクスクス笑いを誘ってしまった。出だしは頗る不調であった。機内ではデザート1回、夕食と朝食を摂り、11時間21分後にデトロイトのメトロポリタン国際空港に着陸した。着陸前の機内でのアナウンスで、ワシントンへはここで乗り換えることになるとのことであった。日本の旅行会社から航空券を受け取ったときには、ワシントンまで直通だから心配ないと聞いていたので、この計画変更にはまたまいってしまった。大分大学の先生が、乗り換えのF3搭乗口まで一緒に行ってくれるとのことだったので安堵はしたもののだが。ところが、私の荷物が一向に出て来なくて、通関をすま

せて外に出たときには大分大学の先生の姿を見つけることはできなかった。乗り換え便の時間が迫っていたので待っていることができなかったのであろう。周囲を見回したが、シャトルバスらしきものはいない。黒人と白人がノースウエストの旗をもって立っていたので、Fウイングへ行きたいといって搭乗券を見せたら、OKと言って、いわゆる日本では6畳間と言うでかいリムジンに案内し、ここで待っていると言う。5分以上は待っていたが、何処へ行ってしまったのか一向に動く気配がない。車のトランクには私の荷物が入っているので出すわけにもいかず、乗り換え時間は迫ってくるし、いらいらしていた。近くに警官がいたので、この車は安全かと聞いたところ、I don't know.と答えて、軽くあしらわれてしまった。まもなく例の黒人の運転手が戻って来て、Fウイングまで送ってくれた。大きな車に、私一人しか乗っていなかったのに、何処へつれていかれるのかと不安であった。しかし意外と親切な運転手であった。後で気がついたことであるが、車をおりる時チップを手渡すことをもう忘れてしまっていた。このような習慣に日本人は慣れていないということを痛感した。

ようやくにして、Fウイングに着くことはできたが、今度はF3搭乗口がわからない。あたりまえのことではあるが見渡せど、外国人ばかりでこれにはまいてしまった。日本人のような顔つきをした人をつかまえて日本人かと尋ねると“N o !”と冷たい返事。中国人か韓国人であったかも知れない。そこでINSURANCE(保険)と書かれたボックスに年配のアメリカ人女性が座っていたので、ワシントンへ行きたいむね尋ねたところ、親切に搭乗口の場所、手続きについて説明してくれた。実はこの女性に尋ねる前、荷物検査の辺りにいたノースウエストの係員にも尋ねたのだが、彼の説明がどうも納得がいかなくて、この女性に聞き直したのがよかった。あそこで、彼の言うようにシャトルバスにでも乗って何処かへ行っていたら、恐らくワシントン行きの際には間に合わなかったであろうと胸をなでおろしたところである。自分で荷物のX線検査をして、長い通路を荷物を引きながらF3搭乗口へ行く。やっと見つけて搭乗手続きをすませることができた。とにかく大きな空港であった。このとき出発時間はすでに大きく過ぎていた。半ばあきらめていたが、ワシントン行きが遅れていたために搭乗手続きをすることができたということである。ここでまた1時間ほど待つことになった。しばらくしてアナウンスがあった。どうも搭乗口に変更があると言っているようである。待合室はざわざわしているし、英語の場内アナウンスというやつは聞き取りにくくてしょうがない。周囲は外人ばかりで、気楽に聞くこともできない。窓の方に目をやると、アメリカ人の乗務員らしい制服を着た男がいる。勇気を出して **Excuse me.**と声をかけてみた。する

とこの男も親切に搭乗口が変更になっており、搭乗手続きをやり直すように教えてくれた。憑いているぞ！渡る世間に鬼はなしだ！正にこんな実感であった。アメリカ合衆国は多民族国家であり、さすがに閉鎖的でないのだなあー、とも感じた。また、長い列に並んで搭乗手続きをやりなおすことになった。更に1時間ほど待たされてようやく Washington/National Air Port 行きに乗ることができた。ここでは、Smoking 席を先に乗せるとのアナウンスがあったので真っ先に飛び乗った。隣の座席は、中年の太ったヘビースモーカーのおばさんであった。そのころ私もヘビースモーカーであったので、日本のタバコと交換したりして英会話の練習がてら楽しい時間を過ごすことができた。17:45 に到着の予定が 2 時間も遅れての到着であった。この遅れも、私の最初の外国旅行にとっては味方して呉れた事になる。もし時間通り運行されていたなら、何処かで乗り遅れていたかもしれない。

ワシントン空港のゲートを出ると、Dr. Thomas R Fewell (以下、Tom という) 夫妻が HISASHI MAEKOSHI と書いたプラカードを高々と掲げて待っていてくれた。本当にやれやれという気持で一杯であった。Tom には 2 時間も待たせてしまったことを謝した。予期せぬことがあまりにも多く発生したので、私自身はもう何日も過ぎてきたような気がしていた。Tom の車でモータルまで送ってもらった。私が国家公務員であることということを知ってか、できるだけ安いホテルをとっておいてくれたようである。ポトマック河を遡ってワシントンから 30km ほど北にあるロックビルという町がこれから生活する場である。モータルまで行く途中、とにかく腹がペコペコであることを話すると、躊躇することなくハンバーガー屋に車を止め、夕食をとることになった。これから暫くの間こんなものばかり食べて過さなければならないのかとセンチメンタルになったものである。

手紙を読み返してみると、悪戦苦闘の末やっと目的地のワシントンに着くことができたこと、こんなに疲れたことは未だかつてなかったことなど書かれており、その日はシャワーを浴びて死んだように寝てしまったようである。たかがワシントンへ行くのにそんなに苦労して…、と笑われそうである。私自身、初めての経験であったためではある。何事も経験が大切な教えであった。

(平成9年9月9日記)

(名古屋大学医学部教授・保健学科)